

二つのスポーツインターを結ぶ書簡

——統一への試行——

唐 木 國 彦

第一次大戦後の国際労働者スポーツ運動は二つの頭をもっていた。「社会主義労働者スポーツインターナショナル」(通称ルツェルン・スポーツインター、LSI、一九二〇年創設)と「赤色スポーツインターナショナル」(RSI、一九二一年創設)がそれである。両者は戦間期において、西ヨーロッパ、東ヨーロッパだけでなく、アメリカ合衆国、パレスチナにも下部組織を広げ、二〇〇万人を超える労働者スポーツマンを傘下におさめたのだった。

だが、この国際労働者スポーツ運動の発展過程は苦難に満ちたものであった。運動は「三つの戦線」を同時にかかえこんでいた。その一つは、各国内における「ブル

ジョアのスポーツ運動」との闘いである。体制内的な既存スポーツ組織は、政府、軍隊、企業の支援を受け、労働者の組織化にきわめて有利な立場に立っていた。これにたいする会員争奪戦と宣伝戦は、各国労働者スポーツ組織の最大の課題であった。二つは、両スポーツインター間の確執と相克である。最初ドイツに始まる政治路線選択の争いは、そのまま両スポーツインターの対立に発展し、まさに「兄弟敵」の関係をつくりだした。いくつかの国の労働者スポーツ組織が二系列に分裂して、互いに力を弱め合う事態をまねいた。この分裂と対立による力の分散は、第三の「戦線」である反帝国主義戦争・反ファシズム闘争にきわめて深刻な影響を与えた。イタリ

一、ドイツの組織がファシストに解体されたときにも、ほとんど国際的な抵抗運動を展開することができなかったものであった。

このように「三つの戦線」のうち二つは、労働者スポーツ運動が戦間期の時代的狀況のなかで労働者大衆のスポーツ活動を保障するために、不可避のものであった。だが、内部分裂に起因する第二の「戦線」も同じく不可避であったのかどうかは、検討を要するところである。他の「労働者文化運動」⁽¹⁾にもあったように、国際政治運動、労働組合運動の分裂の連鎖現象として他律的に労働者スポーツ運動に分裂が生じたということは一面でいえるであろう。しかし、何故スポーツ組織としての自立性が政治運動、労働組合運動に向けて主張できなかったのか、逆に労働者スポーツ運動の側から事態を分析することも必要だと思われる。というのは、この分裂問題は、とくに政治とスポーツとの関係におけるスポーツ運動の相対的自立性の問題として、第二次大戦後のスポーツ運動に大きな教訓を残しているからである。

そこで本稿では、両インターのあいだでの分裂修復の努力、統一への試行がどのようなになされたかを見ること

によって、政治とスポーツとの関係におけるスポーツ運動の相対的自立性という問題が当事者としての両インター指導者にどこまで自覚されていたかを検討することにした。なお検討に先立って、今回新たに所在が明らかになった両インター指導者間の往復書簡について資料的な価値と意味づけをしておきたい。

(1) Vgl. G. A. Ritter, Arbeiterkultur im Deutschen Kaiserreich, Probleme und Forschungsansätze, in: Arbeiterkultur (Hrsg. G. A. Ritter), Königstein 1979. において、政治過程から相対的に自立した「労働者文化」の概念が検討されている。

一 労働者スポーツ研究と往復書簡の位置

労働者スポーツ運動史研究は、一九六〇年代、ドイツ民主共和国(東ドイツ)のライプツィヒ体育大学において集中的に取組みが始まる。ここでは、「スポーツ科学の研究部門としての身体文化史は、社会主義的国家意識を支えるひとつの構成要素としてのマルクス・レーニン主義の歴史像をスポーツマンに啓発するために貢献する⁽¹⁾」といわれるように、東ドイツの社会主義建設とそこ

でのスポーツの役割を過去の労働者スポーツ運動から解明しようとする努力がなされた。とりわけ六〇年代の「ベルリンの壁」をきっかけとする緊張関係のなかで、西側の反動化を新たなファシズムの徴候と見て、戦前、戦中の赤色スポーツ組織の反ファシズム闘争の「伝統」が強調されたのであった。⁽²⁾

これらの研究を支えたのは、ライプツィヒ市のドイツ図書館であった。ここに所蔵されている「赤色スポーツインター」(RSI) 関係の機関紙、パンフレットなどは、ナチスの略奪と戦火をまぬがれて利用に供された。また、治安当局の文書も、ブロイセン、ザクセンの労働者スポーツ組織関係のものが保存されており、博士論文に資料的な独自性を盛り込むことができたのである。

これにたいしてドイツ連邦共和国(西ドイツ)では、一九六〇年代末にいたるまで、ほとんど研究が進められなかった。その最大の原因は、若干の例外をのぞいて、西ドイツでは労働者スポーツ運動の再興が放棄されてしまった点にある。戦前の運動は社会民主党からも見放され、「市民スポーツ運動」に統合されてしまったため、研究対象からも外されていたのであった。⁽³⁾

ところが、一九六〇年代末の学生運動のなかで、いわゆる新左翼の立場から「市民スポーツ運動」の批判が提起されるにおよび、突如として労働者スポーツが「発見」される。⁽⁴⁾ とくにプロサッカーを中心とする商業主義的傾向と東ドイツとのメダル獲得競争にあらわれる国家主義的傾向が批判の対象とされ、その「アルタナティヴエ」として、労働者の生活要求から出発した戦前の労働者スポーツ運動に光があてられたのであった。

政治学者H・ティンマーマンは、その西ドイツにおける最初の「発見」者であった。彼のマールブルク大学での博士論文『労働者スポーツ運動の歴史と構造、一八九三—一九三三』(一九六九年)⁽⁵⁾ は、ライプツィヒ体育大学図書館をはじめ、ヨーロッパ各地の文書館を活用するとともに、戦前の組織指導者へのインタビューを駆使したもので、政治運動としての労働者スポーツ運動の構造を詳細に分析した結果がまとめられている。ついで、一九七三年、ルール大学のH・イーバーホルスト教授が『ドイツにおける労働者スポーツ運動、一八九三—一九三三』⁽⁶⁾ と題する大著をまとめる。ここで彼は東ドイツとティンマーマンの歴史記述を政治的、イデオロギー的側

面を強調しすぎたと批判をして、労働者スポーツ運動を「社会・文化史」的な観点から再構成してとらえ直そうとする。その結果、東ドイツとは逆に社会民主党系の「ルツェルン・スポーツインター」(LSI)とドイツの労働者スポーツ体育中央委員会(ZK)の路線を現在の社会民主党のスポーツ政策との連続性において把握する結論を導き出したのであった。

ところで、西ドイツにおけるこれら二人の先駆者の資料にはひとつの共通点がある。それは、彼らの一次資料の大半が、かつて労働者体育スポーツ連盟本部(ライプツィヒ)で出版局の責任者をしていたH・ダスが収集したものに依拠していることである。ダスは、戦後、労働者スポーツ運動が西ドイツで途絶え、資料が分散してしまっていることを憂慮し、一九六五年以来、かつての指導者および会員が私蔵している機関紙、パンフレット、文書類、その他ありとあらゆる出版物を系統的に収集したのであった。また国際組織関係について、長らくLSIの事務局長の任にあったベルギーのJ・デブリーガーの遺品をゆずり受けた。ダス自身、これらの資料を用いて、一九六六年、六七年の二回にわたって、「ATU S

インフォーメーション⁽⁷⁾」と題するパンフレットを出版して、戦前の運動の概要と連合軍占領時代に運動組織が再建されなかった事情を世間に知らせたのだった。しかし、ダスは老齢のため、それ以上自分で資料をかかえていることを断念し、ドイツ関係のものを「ATU S目録」、国際関係のものを「S A S I目録」に分類、整理し、一九六七年以来数回に分けてボン市内の社会民主党文書館にそっくり寄贈したのであった。⁽⁸⁾ H・ティンマーマンとH・イーバーホルストが利用したのは、実はこのダスの「目録」に載せられた資料であり、ダスの努力がなければ西ドイツの労働者スポーツ研究そのものが不可能であったのである。

その後、社会民主党文書館では独自の分類で文献学、司書学の観点から「目録」を再構成し、欠如部分をマイクロフィルムで補足し、さらに戦後の関連文献を加えて『労働者スポーツ運動』と題するビブリオグラフィにまとめた。⁽⁹⁾ それは同時に蔵書目録でもある。ここに収められている資料は、ライプツィヒおよびベルリンにある政府・公安関係の文書と、おそらくモスクワにあると思われる赤色スポーツ関係の議事録をのぞけば、世界でも

とても完璧な一次資料のひとつであるといえる。

西ドイツでは、ほかにケルン体育大学中央図書館に労働者スポーツのコレクションがある。これは戦前のベルリン体育専門学校の蔵書とドイツ体育連盟(DIT)の圖書を移管したものであり、社会民主党文書館のものとほとんど重複している。⁽¹⁰⁾ また、ボン大学スポーツ科学研究所図書館には、ダスが重複して所有していた蔵書と、一九二五年の第一回労働者オリンピック大会の記録映画が残されている。さらにドルトムントの内外労働者文学研究所には、当地の労働者スポーツ・文化カルテルの会長であったW・ビュルガー(一八九二—一九七八)の遺品が一九八〇年六月から公開されている。そのなかには、ドルトムント市内の労働者スポーツクラブの総会議事録、会員名簿、会計簿、写真、大会プログラムなどがあり、クラブの日常的な活動を知るために貴重な資料を提供している。⁽¹¹⁾

このように、一九六〇年代末から西ドイツでも労働者スポーツ運動研究を可能にする資料的な蓄積ができてきたわけであるが、国際組織についての一次資料はまだ限定されている。さきの社会民主党文書館の蔵書目録も印

刷された出版物に限られている。ところが、一九八〇年七月、筆者は偶然のことから、社会民主党文書館で未整理のダスの収集資料の書類ケースから、手紙の束を発見した。それはダスの「目録」にも載っていないものであった。

手紙はLSIの事務局長デブリューガーが所有していたもので、電報を加えると五〇通ある。その大半はモスクワのRSI本部と同ベルリン支部からのもの、LSIからRSIへの手紙の写しである。ほかにLSIのドイツ・フランス、イタリー支部からのものが五通あるが、全体としてLSIとRSIとの往復書簡集であるといっていよい。用いられている言語は、LSIからはフランス語、RSIからはロシア語とドイツ語であり、部分的にドイツ語訳が含まれている。これはLSIの事務局会議で議論をするさいに、ドイツ、オーストリア、チェコスロバキアの代表者のために翻訳されたものであると思われる。LSIとRSIとのあいだの手紙文については、これまでも若干労働者スポーツ組織の機関紙、パンフレットに公開されていた。ドイツの「労働者体育スポーツ新聞」⁽¹²⁾には必要に応じてRSIへの攻撃材料として手紙が

引用されることがあった。また、一九二四年に出版されたRSIドイツ支部のパンフレット「交換書簡」⁽¹³⁾にも両インターの手紙が一〇数通公開され、LSIへの攻撃材料にされている。さらに一九三〇年代に入ってからRSIのアカサミットが編集した「書簡集」⁽¹⁴⁾には、三〇年代の反ファシズム統一戦線への動向が盛られている。

しかし、一九二〇年代前半から一九三〇年代半ばまでの両インターの生の主張を書きつらねたサイン入り、書き込み入りの手紙の現物が得られた意味は大きい。組織統一の交渉過程、交渉の決裂、ファシズムにたいする状況判断、それぞれのインターのスポーツ観など、これまで公開されなかった興味ある内容を含んでおり、先の「三つの戦線」の構造的把握をするうえで欠かせないものである。そこで、次節では、両インターの成立、発展の過程を年代記的に追いつながら、この往復書簡が交わられたそれぞれの時点での意義を検討することになろう。⁽¹⁵⁾

(1) G. Erbach u. a. (Hrsg.), *Kleine Enzyklopädie, Körperkultur und Sport*, Leipzig 1972. SS. 20-21.

(2) これらの先行研究については、拙稿「ドイツ労働者スポーツ運動の成立条件と基本理念」、中村敏雄他編『スポーツ

インターナショナルイズム』大修館書店、一九七八。二九、三〇〇ページ参照。

(3) Vgl. F. Nitsch, Warum entstand nach 1945 keine Arbeitersportbewegung? in: *Sportwissenschaft*, 6. Jg. 1976. 2. SS. 172.

(4) Vgl. Böhm u. a., *Sport im Spätkapitalismus*, Frankfurt/M. 1970. u. J. Fischer/P. Meiners, *Proletarische Körperkultur + Gesellschaft*, Zur Geschichte des Arbeitersports, Gießen 1973.

(5) H. Timmermann, *Geschichte und Struktur der Arbeitersportbewegung 1893—1933*, Ahrensburg 1973.

(6) H. Ueberhorst, Frisch, frei, stark und treu, Die Arbeitersportbewegung in Deutschland 1893—1933, Düsseldorf 1973.

(7) H. Daß (Hrsg.), *ATUS-Information*, Folge 1. u. 2. Hannover 1966/67.

(8) H. Daß, *Quellensammlung zur Geschichte der Arbeiter-Turn- und Sportbewegung*, in: *Internationale wissenschaftliche Korrespondenz zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*, H. 4, Juni 1976, SS. 48—50.

(9) *Arbeitersportbewegung, Ein Bestandsverzeichnis der Bibliothek des Archivs der Sozialen Demokratie*, Bonn 1981.

(10) P. Wälken/F. Claus, *Bücher-Verzeichnis*, Berlin

(63) 二つのスポーツインターを結ぶ書簡

番号	日付	発信地	発信者	受領者	受領地	言語
Nr. 1	1924. 3. 19	Berlin	Wildung	Devlieger	Fléron	D
Nr. 2	1924. 5. 8	Fléron	Devlieger	Lieske	Berlin	F
Nr. 3	1924. 5. 20	Berlin	Lieske	Devlieger	Fléron	F
Nr. 4	9. 50 Uhr	Moskau	FSI	SASI		F
Nr. 5	1924. 6. 9	Moskau	RSI	Devlieger	Fléron	F
Nr. 6	1924. 6. 18	Fléron	Devlieger	RSI	Moskau	F
Nr. 7	1924. 7. 7	Fléron	Devlieger	RSI	Moskau	F
Nr. 8	1924. 7. 8	Moskau	Reussner	Devlieger	Fléron	D
Nr. 9	1924. 7. 21	Fléron	Devlieger	Reussner	Moskau	F
Nr. 10	1924. 8. 20	Moskau	Reussner	SASI	Fléron	F
Nr. 11	1924. 8. 27	Berlin	Lieske	Devlieger	Fléron	D
Nr. 12	1924. 9. 1	Fléron	Devlieger	RSI	Moskau	F
Nr. 13	1924. 9. 20	Fléron	Devlieger	Reussner	Moskau	F
Nr. 14	1925. 6. 3	Moskau	Mechonischin	SASI	Fléron	D
Nr. 15	1925. 10. 23	Vgl. ATZ	Nr. 22			
Nr. 16	1925. 6. 3	Moskau	Lieske	SASI	Fléron	D
Nr. 17	1925. 6. 7	Vgl. ATZ	Nr. 162			
Nr. 18	1925. 7. 15	Moskau	RSI	SASI	Fléron	F
Nr. 19	1925. 8. 3	Fléron	SASI	RSI	Moskau	F
Nr. 20	1925. 10. 8	Moskau	RSI	SASI	Fléron	F
Nr. 21	1925. 10. 17	Moskau	RSI	SASI	(Ausweis)	D
Nr. 22	1925. 10. 21	Fléron	Devlieger	Reussner	Moskau	F
Nr. 23	1925. 11. 1	Moskau	RSI	LSI Kongr.	Paris	F
Nr. 24	1926. 4. 23	Mailand	Amoff	Devlieger		F
Nr. 25	1926. 4. 28	Moskau	Reussner	Devlieger	Fléron	D
Nr. 26	1926. 5. 18	Berlin	Kom. Jug. Dt.	Devlieger	Fléron	D
Nr. 27	1926. 5. 21	Moskau	RSI, Mehring	LSI	Fléron	D
Nr. 28	1926. 6. 2	Moskau	Reussner	Devlieger	Fléron	D
Nr. 29	1926. 6. 8	Paris	RSI	Devlieger		F
Nr. 30	1926. 6. 14	Mailand	Amoff	Devlieger		F
Nr. 31	1926. 6. 16	Moskau	Mehring	LSI	Fléron	D
Nr. 32	1926. 7. 22/8.	3 Niederschrift ü. Verhandlungen zw. d. Bundesvorstand d. ATSB u. d. Russischen Delegation—In Leipzig				
Nr. 33	1926. 9. 30	Moskau	Mehring	Devlieger	Fléron	D
Nr. 34	1926. 12. 25	Moskau	Rosenko u. a.	Gellert	Leipzig	D
Nr. 35	1927. 1. 27	Moskau	Rozenko u. a.	Devlieger	Fléron	R
Nr. 36	1927. 4. 5	Moskau	Pawlow u. a.	Devlieger	Fléron	D
Nr. 37	1927. 6. 28	Moskau	Pawlow	LSI	Fléron	D
Nr. 38	1927. 7. 28	Moskau	Reussner u. a.	LSI	Fléron	F
Mr 39	1927. 7. 30	Freie Presse Straßburg				
Nr. 40	1927. 7. 15	5. Vollsitzung des Exekutivkomitees d. RSI				D
Nr. 41	1929. 11. 16	Brief aus Italien an Devlieger (nicht vorhanden)				
Nr. 42	1929. 12. 4	Milano	Amoff	Devlieger	Brüssel	F
Nr. 43	1935. 10	Moskau	Raspwvine	Devlieger	Belgiq	F
Nr. 44	1935. 11. 26	Moskau	Raspwvine	Devlieger		F
Nr. 45	1935/36	Resolution du Conseil National sur l'Unite Internationale				F
Nr. 46	1936	Julius Deutsch an Moskau (nicht vorhanden)				
Nr. 47	1936. 6. 10		Deutsch	H. R. f. P.	Moskau	D
Nr. 48	1936. 6. 13		Deutsch	RSI	Prag	D
Nr. 49	1936. 6. 15		Deutsch	Satus	Bern	D
Nr. 50	1936. 6. 27		Deutsch	Aksamit	Prag	D

1936. 以下の目録がある。

- (11) Institut für deutsche und ausländische Arbeiterliteratur, Wilhelm Bürger und die Dortmunder Arbeiter-Sport- und Kulturbewegung, Dortmund 1980.
- (12) Arbeiter Turn Zeitung (ab 1919 Arbeiter Turn und Sport Zeitung) Organ des ATUS 1893—1933. Vgl. 1925, Nr. 22 u. Nr. 162.
- (13) Werbeschrift der RSI, Schriftwechsel zwischen Rote Sport-Internationale und Luzerner Sport-Internationale, Berlin um 1925.
- (14) C. Aksent (hrsg.), Um die Einheit des Arbeitersports. Briefwechsel zwischen der RSI und der SASI und eine Dokumentarsammlung, Prag o. J.
- (15) H・ダスの分類による往復書簡(使用言語「D II ドイツ語」「F II フランス語」「R II ロシア語」)は右一覽表参照。

二 両インターの発展過程と統一への試行

二つのスポーツインターの「関係」に視点を定めて国際労働者スポーツ運動の発展過程を時代区分するとすれば、およそつぎの五段階に分けられる。(一)第一次大戦までの準備期、(二)一九二〇・二一年の創設期、(三)一九二四年から一九二七年夏にかけての相対的安定期、(四)一九二

七・二八年からの決定的分裂期、(五)一九三三年からの統一模索期。前節で触れた両インターの往復書簡は、右の(三)、(四)、(五)の段階に交されたものである。しかし、両インターの成立過程における理念問題を押えておくために、(一)、(二)についても簡単に振返っておこう。

(一)準備期。第一次大戦前の一九一三年、ベルギーのセントにおいて「第一回社会主義労働者スポーツマン国際会議」が開催される。これが後の「ルツェルン・スポーツインター」(LSI)の結成につながることになる。

当時ベルギーでは、社会主義体育連盟とその青少年組織「人民の子」にわずか五〇〇〇人の会員をかかえていただけであるが、すでに一九一〇年以前からドイツ・ルー地方、フランス北部地方とクラブ単位での自然発生的な交流があった。これに着目した社会主義体育連盟のG・ブリドゥーは、ベルギーを仲介してドイツとフランスとを結びつけ、人的な連絡網をつくる。そして一九一二年八月一日、第二インター事務局に「ブルジョアジ」と資本主義から「中立」な「国際スポーツ組織連合」を結成することの了解をもとめる。続いて同一六日、各国の第二インター支部に賛否を問う。その結果、ドイツ、

イギリス、オーストリア、ベルギー、フランスから賛成の回答を得た。⁽¹⁾

一九一三年の「第一回社会主義労働者スポーツマン国際会議」には、右の賛成国のうちオーストリアをのぞく四カ国が参加した。新たに国際組織を結成することを決め、その目的、事業内容について翌一四年八月ケルンでの会議で検討する予定であったが、第一次大戦の勃発で中止される。しかしこの準備期において、LSIが第二インターとの関係を結ぶ道がつけられたことは重視されてよい。⁽²⁾

(二)創設期。戦後、一九一九年、再びブリドゥーによって国際組織化の「研究会」がベルギーのサレーンで開催される。ここでLSIの大意が決まる。すなわち、「すべての社会主義的スポーツ連盟の友好関係樹立」と「ブルジョア連盟から青少年を連れもどすこと」が提唱されたのである。また、すでにこのとき、「財政状態が許すなら、五年毎に労働者オリンピックを開催する」という提案がフランス代表から出されていた。⁽³⁾

一九二〇年九月一四・一五日のLSI創設会議には、ドイツ、イギリス、ベルギー、フィンランド、フランス、

スイス、チェコスロヴァキアの七カ国が参加した。ここで大略つぎの決定がなされる。⁽⁴⁾

一、名称「スポーツ体育国際労働者連合」。二、目的「労働者、とりわけ青年男女に体育、スポーツ、トゥルネン、ワンダーフォーゲルを奨励し宣伝すること」。「すべての国の体育分野において、資本主義、ナショナリズム、軍国主義に反対する闘争をすすめること」。三、資本主義社会とその政府につぎの要求をする。労働者スポーツ連盟の承認と援助および「完全なる活動の自由」の保障。学校体育の重視と教授の自由。「すべての国民諸階層(Volksschichte)への十分なスポーツ施設、十分な自由時間の保障」。鉄道運賃割引、青少年宿泊施設、競技会入場税の撤廃の実現。四、社会主義政党および労働組合への要望。各国労働者スポーツ連盟の要求を「プロレタリアートの生存のための利益」のために全力をあげて実現すること。黨員、組員は「ブルジョアスポーツ連盟・クラブ」に所属しないこと。

この「ルツェルン決議」の特徴は、第一次大戦の経験から反戦と青年労働者の教育を基調に労働者スポーツ運動を組織化しようとした点にあらわれている。しかし、

各国政府の努力に期待した諸要求と、その実現をとりわけ社会主義政党に要請した点は、後に「コムニスト対派」との論争の種になる。

対する「赤色スポーツインター」(RSI)は、翌一九二一年六月二日―七月一二日開催のコミンテルン第三回世界大会を機にして結成される。

スポーツ運動組織としてのRSIの前身は、ソ連ではなく、むしろドイツにあった。すなわち、当時ソ連で組織的スポーツ活動に従事していたのは赤軍兵士と学童生徒であって、独自の労働者スポーツ運動はまだ展開されていなかったのである。⁽⁵⁾これにたいしてドイツでは、政治的路線の対立がすでに一九一九年初頭から現われ、新たな国際組織に結集する勢力が生まれていた。

一九一九年のスバルタクス団「一月闘争」に加わったベルリン最大のクラブ「フィヒテ」は、ライプツィヒの労働者体育スポーツ連盟(ATUS)本部の方針に逆って革命路線をとり、「コムニスト反対派」を形成する。

同年開催されたATUS第一二回総会で、この「反対派」は「政治党派的中立」を主張する連盟幹部と対立するが、翌二〇年三月のカップ一揆によって一旦対立が緩

和される。

一九二一年一月一五・一六日、イエナで開催された第一回労働者スポーツ会議の席上、ドイツのLSI加盟を提案したF・ヴィルドゥンクからATUS幹部と「反対派」は、真正面から対立する。「反対派」は、ソ連を排除したベルギー社会民主党系指導者(G・ブリドゥー)に牛耳られるLSIは「黄色インター」の一部であり、「プロレタリア的革命精神」に反する「小ブルジョア・修正主義」の組織であるとして、LSI加盟反対決議案を提出する。この決議案が否決されたことにより、「⁽⁶⁾反対派」は新たな国際組織の結成を決意したのであった。

一九二一年のRSI創設会議には、ソ連、ドイツ、フランス、イタリー、チエコスロヴァキア、スウェーデン、フィンランド、ハンガリーの代表が参加した。ここでRSIの目的として確認されたのは、「既存の労働者スポーツ組織をプロレタリア革命に奉仕させること」および「メンシェヴィーキ的LSIからの労働者スポーツ組織の脱退」であった。また、RSIモスクワ本部には、コミンテルン執行委員会代表を常駐させ、会長はボドヴォイスキー(ソ連)が選出され、事務局長にはB・リー

スケ(ドイツ)が着任することになった。⁽⁷⁾

こうして二つのスポーツインターは、政治的にはLSIⅡ第二、第二半インターⅡ社会民主党系列、RSIⅡ第三インターⅡ共産党系列にあるものとみなされることになった。しかし、創設期にはまだ両者は遮断された関係にはなかった。RSI事務局長のリースケは社会民主党系幹部が支配するATUSの本部役員のままであったし、ベルリンを中心とする「反対派」もATUSに加わっていた。さらに両スポーツインターの組織規模を比較すると、RSIはLSIの十分の一に満たなかったから、スポーツ施設利用、競技会の開催などの場面で会員は依然として同じスポーツ活動に参加せざるをえなかった。だから、RSIの創設は、会員のスポーツ活動上の必要からというより、むしろLSIにたいする政治戦略的な意味をもっていたといえよう。

(三) 一九二四年からの相対的安定期を特徴づけるのは、第一回労働者オリンピック大会(一九二五年七月二四日、LSI主催)⁽⁸⁾と「独ソ・スポーツ協定」(一九二六年八月三日)であろう。RSIはオリンピック大会に参加できなかったが、その参加をめぐって両インターのひ

んばんな意見交換がなされ、スポーツ交流の実現につながるのである。

フランクフルト・アム・マインで第一回労働者オリンピック大会を開催するという決定は、ちょうど三年前の一九二二年七月二六日、LSI国際会議(ライプツィヒ)でなされた。ここで問題になったのは、RSIの参加である。⁽¹⁰⁾一九二四年四月二五日、両インター代表はこれについてフランクフルトで協議会をもつ。席上、LSI側は両インターの「併合」(Fusion)によってRSI参加を自動的に解決しようとするが、RSI側はオリンピック共催を経て「合併」(Verschmelzung)すべきだと主張する。⁽¹¹⁾この即時「併合」論と段階的「合併」論との意見調整の過程が前節で紹介した往復書簡の前半部分二二通に残されている(以下、書簡番号はH・ダスによる)。

一九二四年五月八日、LSI事務局長デブリーガーは、先の即時「併合」論を「階級闘争に使命感をもつすべてのプロレタリアートに受け入れ可能な条件」だとして、重ねてRSIの意向を問う(書簡二)。同年六月九日、RSIはつぎの「五原則」のもとに両インター同数委員によるオリンピック組織委員会を編成することを提案す

る(書簡五)。

一、体育(Körperziehung)を階級闘争の手段として役立てること。

二、労働者スポーツ組織は、断固として「ブルジョアスポーツ運動」に挑戦すること。

三、ブルジョア軍国主義、ファシズム、反動にたいし、固い統一戦線をもって対決すること。

四、資本主義諸国の戦争威嚇に反対して闘うこと。

五、ブルジョアジーとのいかなる連合も拒否し、資本主義の廃止と労働者階級の勝利のために闘うこと。

LSI側は、この「五原則」は「ルツェルン決議」の精神に一致するものと評価し、RSIがLSIに「帰還」するか、「コムニスター」に残るかの選択をすることをとめる(書簡六、七)。ここでは、RSIがLSIからの分裂組織であり、コミンテルンの下部組織になっているというLSI側の判断が露骨に示されている。RSI側はこれに反発して、LSIこそドイツとエルザス・ロートリンゲンで「体系的な分裂キャンペーン」を展開しているのではないかと反撃する(書簡九)。ここでようやく共通の基盤を見い出した両インター

は、自己弁護と主流争いに移ってしまう(書簡一〇、一一)。

ついにLSIは、一九二四年九月一四日、ウィーン事務局会議でつぎの三点を「全員一致」で決定してしまう(書簡一三)。

一、フランクフルト・オリンピックは、LSIのデモンストレーションである。

二、同オリンピックへの参加資格は、LSI加盟組織のみに限定する。

三、いかなる国の組織も、LSIの原理を認め「それにふさわしい態度」をとる努力をするなら、LSIに自由に加盟できる。

一九二五年六月、ソ連体育最高評議会議長メヒョノシンから「最初のプロレタリア国家、最初に実際上の労働者・農民政府をもつ国家、地球上の六分の一をしめる国家を第一回国際労働者オリンピックから排除してしまうのは、まったくブルジョアの利益にしかない」として、ソ連のオリンピック参加要求をする(書簡一四)。また、同年七月一五日、RSI会長ボドヴォイスキーから、戦争とファシズムの危機を前にして両インターの統

一をしなければならぬ時期にLSIがオリンピック参加拒否の「最後通告」を送りつけてきたことを重く見て、つぎの二点をLSIに伝える（書簡一八）。

一、LSI指導部と協議するための代表団をただちに派遣し、統一促進の具体的な足場固めをする用意がある。
二、協議の可能性がほとんどない場合は、RSIのスポーツマンを何人か第一回労働者オリンピックに送り、「RSIのすべての組織が国際労働者農民スポーツ体育戦線の確立に向けてゆるぎない意志をもっていることをデモンストレーションする」。

つまり、LSI内部にソ連参加を支持する組織（ドイツ、イタリー、フィンランド、スイス、エルザス・ロートリンゲン）があることを承知してLSI指導部に「ゆさぶり」をかけたり、労働者オリンピックをRSIの逆宣伝の場にするとか「おどし」をかけたのであった。しかし、それはすべて徒勞に終わった。第一回労働者オリンピック大会は、ソ連、ノルウェー、フランス、チェコスロヴァキアのRSI組織を排除したまま、一九二五年七月二四日に敢行された。

祭典の後、残る課題はただ一つ、統一問題であった。

もはやLSIもこの課題を無視するわけにはいかなかった。八月三日、LSIは「労働者スポーツ大衆の統一問題を解決するために与えられた唯一最良の方法」として、「すべてのロシアの労働者スポーツの仲間にたいして、無条件で、他国のプロレタリアスポーツマンと同列の資格で、門戸を開く」ことを表明する（書簡一九）。これにたいしてRSIは、「新たな世界戦争の危機」、「ブルジョア諸国のプロレタリアートの状態の悪化」、「ブルジョア的、ファシズム的スポーツ組織の強化」、「反ソブルジョア統一戦線の企て」などを理由に、「特別な条件は何ら設定せずに」両インター統一の検討に入ることとを要求する（書簡二〇）。同時にRSIは一〇月三〇日に開催されるLSIパリ会議で統一問題を協議するため代表者を派遣する旨申し入れるが拒否される（書簡二二）。

パリ会議では大略つぎの三点が決議される。

一、LSI支部が存在しない諸国との競技会を承認する。ただし、「あらゆるスポーツ的、政治的デモンストレーションおよび政党との公式交流を慎むこと」。

二、LSIから分裂した連盟との競技会は許さない。

三、現時点においてRSIとの統一 (Einigung) は不可能である。⁽²⁾

この決議から、LSI指導部の戦略がほぼ明らかになる。すなわち、第一項においてソ連を別格扱いにして交流をすすめることによって、LSI内部のソ連支持勢力を押え、あわよくばソ連を自陣営に引きつけることをねらい、第二項において「分裂した連盟」をあくまでも異端視して、RSIが分裂主義者の集まりであることを公言し、第三項においてそのような分裂主義者が支配するRSIとは当面統一問題について協議しない、という見解に立っていたのである。しかし、ソ連との交流を認めたことによって、かねてからRSIが主張していた段階的「合併」論にLSIが一步近づいたことになった。というのは、一九二六年に入ってから、ドイツ労働者体育スポーツ連盟は二回にわたってソ連との首脳会談を行ない、同年八月三日「独ソ・スポーツ協定」を結ぶ。ソ連チームはこのドイツのほか、フランス、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンなどと交流し、その種目もサッカー、陸上競技、射撃、ボクシングなど多岐にわたった。そして、交流が重なるにわたって国際統一ルール

を取り決める必要が生じ、まったくスポーツ上の理由から両インターが統一組織のための協議をせざるをえなくなったからである。これは、共同事業から統一会談を経て両インターの統一へ、という段階的「合併」論の路線であった(書簡二五、二六、二七、二八、二九参照)。

(四) 決定的分裂期は、ソ連とのスポーツ交流にたいするLSIの思惑外れと、あくまでも統一のための合同会議開催を主張するRSIの提案が拒否されたことによって訪れる。

一九二六年六月以来、RSIは再三にわたってLSIとの合同会議を要求するが(書簡三一、三三)、LSI側はソ連との交流を認めたのが「最大の譲歩」であって、パリ会議の原則より一步も先に進めないとする。また、LSIは、国際統一ルールを議論するための「国際技術会議」を同年一二月二六日ドイツで開催するが、形式的にソ連を招待しただけで実際には参加できない日程を押しつけた。というのは、開催のわずか三日前に招待状がソ連に送り付けられたため、会議までに入国ビザが取得できなかったのであった(書簡三三、三四、三五)。

ソ連にたいするLSIの硬直化には、LSI自身の思

感外れがあった。ソ連チームは最初パリ会議の第一項にあるように政治的デモンストレーションを「慎しむ」かに見たが、交流を重ねるにしたがってRSIの宣伝隊の役割をはたすようになったのである。それを後方で糸を引いているRSIは、統一相手として信頼できないという判断を持ち始めたのである⁽¹³⁾。

一九二七年四月に入って、RSIは自ら国際統一ルールを検討する「技術会議」を開催し、LSIを招待する(書簡三六)。さらに六月二八日、七月二八日の二回にわたって、「反帝国主義戦争」、「反ブルジョアスポーツ運動」、「反アムステルダム・オリンピック」のために両インターの統一を重ねて訴える(書簡三七、三七—A)。しかし、LSIは八月五日からヘルシンキで開催された第四回大会でつぎの決定をする⁽¹⁴⁾。

一、「大会はバリ決議を確認する。モスクワ・インターとの合併は、双方において対立を緩和する試みを何ら行なうてこなかったため、今日なお不可能と考える」。

二、「大会は、一九二八年のスパルタキアードを共産党の行事であると認め、LSIの諸連盟の参加を禁止する」。

同時にこの大会でLSIは名称を「社、会、主義労働者スポーツインター」(S A S I)と改め、続く第五回大会(ブラハ、一九二九年)で第二インターに加盟を決める。この決定の影響を直接受けたのは、ドイツであった。一九二八年八月、A T U S 理事会は「コムニスト会員」の除名を決め、翌年一月までに三二〇〇名を除名する。ここで排除された「コムニスト会員」を中心に、一九二九年五月二九日、「労働者スポーツ再統一のための連合」(I G、一九三〇年に「赤色スポーツ統一闘争連合」K Gとなる)を結成する。

こうしてRSIもまた統一への道を放棄することになるのだが、この時点でのLSIにたいする評価について、一九二九年七月一日開催された第五回RSI執行委員会での討論内容が参考になる。その要点はつぎのとおりである⁽¹⁵⁾。

一、LSIの基本課題は、「統一的労働者スポーツ運動をつき崩して、ブルジョアの道具に再編する」ことにある。

一、RSIの課題は、「修正主義分裂活動」を続けるLSI指導者との闘争にある。「LSIを改革して、より

よい道へ導いていけるのだという幻想は誤りである」。

「LSI指導者との闘争なくして統一は不可能である」

一、RSIの戦術。LSI内部で反対派を形成している支部、会員は、「革命的政策を貫ける可能性がないからRSIにすみやかに入るべき」である。

(五) 統一模索期は、一九三三年五月、ドイツの労働者スポーツ組織がすべて解体されてしまった後、一九三五年三月、両スポーツインターの会議が再開されるところから始まる。

ドイツのKG(IG)を失った後、RSIはモスクワ本部とブラハ事務局とに分かれてLSI(SASI)との連絡をとる。

一九三五年一〇月、ソ連体育最高評議會はLSIの書記局デブリガーにベルギーとの交流を申し入れ「労働者スポーツ統一」、「反ファシズム」、「反戦」のための共同協定を提案する(書簡四三、四四)。同年二月一日ブラハで開催されたLSI加盟国會議にソ連体育最高評議會からシヨルダクを招き、ソ連スポーツ大会へのLSI参加と両インター統一會議のモスクワでの開催に合意する。また、LSI側も、アントワープ・労働者オリン

ピック(一九三七年)にRSI参加を認める(書簡五二)

LSI側は、これらの合意にしたがって一九三六年一月以来一〇回にわたってソ連行きの計画と日程の打合せ連絡を行なうが、RSI側から明確な返答が得られなかった(書簡四七、四八)。RSI側は、ソ連体育最高評議會、RSIモスクワ本部、ブラハ事務局とのあいだで責任体制と対応の窓口が明確になっていなかったため、LSI受け入れの日程がまったく定まらなかった。最終的にLSIのドイチュとブラハ事務局のアクサミットが日程調整のため七月七日に会うことを決めたが(書簡五〇)、両インター執行機関のあいだでの連絡はこれで終っている。一九三六年六月一日付でSASI会長ドイチュからデブリガーに宛てられた手紙(書簡四九)の末尾にデブリガーが青いINKでつぎのように書き込んである。「コムニストと契約を結ぶのは不可能という感がある」。この一言にRSIとの断裂の深さがあらわされている。

(1) C. Gellert, 10 Jahre Sozialistische Arbeiter-Sport-internationale, Prag o. J. SS. 5—6.

(2) ebenda, SS. 7—9. なお「セント」での開催日について

- 註不明。В. В. Привалов/Е. А. Мельников, Коминтерн и массовые организации рабочего класса, Глава V. Красный Спортивный Интернационал, с. 145. (註 1) 九一三年四月二十七日。
- (3) C. Gellert, ebenda, SS. 10—11.
- (4) J. Deutsch, Sport und Politik, Berlin 1928. SS. 63—65.
- (5) D. Steinberg, Die Arbeitersport-Internationalen 1920—1928, in: Arbeiterkultur, a. a. O. S. 96.
- (6) Arbeiter-Turnerbund, Protokoll über die Verhandlungen des Ersten Arbeiter-Sport-Kongresses abgehalten am 15. und 16. Januar 1921 zu Jena. SS. 46—58.
- (7) H. Timmermann, a. a. O. S. 75 und D. Steinberg, a. a. O. S. 97.
- (8) ソ連をのぞけば六〇万人対六万人であった。
- (9) F. -J. Geisthövel, Die Arbeiter-Olympiade 1925. Ein Kapitel aus der Geschichte der Arbeitersportbewegung, Köln 1978. Maschenschriftliche Ausgabeに詳述されている。なお一九二一年三月六日には第一回チエロスロヴァキア労働者オリンピックが開催されている。
- (10) C. Gellert, a. a. O. S. 20.
- (11) RSI, Schriftwechsel……a. a. O. SS. 4.
- (12) C. Gellert, a. a. O. SS. 26—27.

- (13) H. Timmermann, a. a. O. SS. 84—85, C. Gellert, a. a. O. S. 27.
- (14) SASI, Bericht über den IV. Kongress zu Helsingfors 5.—8. August 1927, SS. 51—52.
- (15) 5. Vollsetzung des Exekutivkomitees der RSI. 15. 7. 29. Iver.

おわり

今回は主として両インターが統一をめざしていかなる努力をしてきたかをその往復書簡に見られるかぎりで年代記的に検討した。ティンマーマンによれば、この統一への努力が挫折したのは、LSI指導部右派が体制内化する社会民主党と結びついていた点とRSIが国際共産主義運動における「左翼的」偏向路線に影響された点に原因があったとされる。スポーツインターの上部に立つ社会主義インターとコミンテルン、各国社会民主主義政党と共産党との対立のなかで、国際労働者スポーツ運動が難波したと見るのである。しかし今回はその問題に触れることができなかった。というのは、スポーツ組織を政治組織と直接結びつけて両者の支配・被支配の関係から全体構造を把握するのがティンマーマンの方法であり、

これにはさらに実証が必要だと思われるからである。

ティンマーマンは政治学者として右の方法を選択したわけであるが、スポーツ運動史としてさらに展開させるには、両スポーツインターの指導部だけでなく、加盟各国の会員が統一問題についてどのような意向をもっていたのか調べなければならぬ。今後この国際労働者スポーツ運動の歴史から教訓を引き出していくために少なくともつぎの資料的な作業が必要であると思われる。

第一は、ドイツだけでなくチェコスロヴァキア、フランス、オーストリア、北欧三国などの国際運動への取り組みを明らかにしなければならない。第二は、ベルギー社会民主主義政党と労働者スポーツ組織との関係を明らかにして、第二次大戦後の国際労働者スポーツ委員会

(CSIT) 結成も含めて三回のイニシアティブをとったベルギーの位置を確認する必要がある。そして第三に、コミンテルンのスポーツ運動にたいする方針について、関係文書から系統的に「指導」の実態を明らかにする作業が必要である。これらの基礎固めをした後、はじめて往復書簡の真の意味づけができると思われる。

(本研究は、一九七九・八〇・八一年度文部省科学研究費による「国民スポーツの国際比較研究」の成果の一部である。なお、資料収集にあたって援助をいただいたドイツ学術交流会(DAAD)にこの場を借りて感謝の意をあらわしておきたい。)

(一橋大学助教授)